慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カトマンズ近郊の都市フロンティア : パタン市の町形成を事例に
Sub Title	Urban frontier of Kathmandu valley : a case study of Patan city
Author	Maharajan, Keshav L.
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2002
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.95, No.2 (2002. 7) ,p.221(31)- 240(50)
JaLC DOI	10.14991/001.20020701-0031
Abstract	中世以来のバタンの町はネワールの町の特徴とされる地域構造、社会構造を保持しながらも拡大・重層化し、都市フロンティアとして外部者を呼び向かわせてきた。その際、20世紀に振興された西部地域は、上位身分に連携する都市フロンティア、旧市街地が拡大し新旧の構造が混在する北部および東部地域は、都市的雑業に就労する流動住民を含む大衆の都市フロンティア、従来の町の構造に変化がみられない古都にあたる町の中心部は、異種の都市フロンティアとしての様相を提示している。 Since the medieval period, Patan City has maintained historical characteristics that are considered to be unique to the town of Newar, such as regional and societal structures, and yet has expanded and become stratified, attracting outsiders to the city as a frontier. In the process, the western region, which was developed in the 20th century, has the appearance of a city frontier associated with upper classes; the northern region where the old city area expanded and old and new structures coexist combined with the eastern region appear to be a city frontier of the masses, including fluid inhabitants engaged in urban menial jobs; and the central part of the city, where the ancient capital was located without apparent structural changes, seems to represent a different type of city frontier.
Notes	小特集 : フロンティアの比較研究
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20020701-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カトマンズ近郊の都市フロンティア ―パタン市の町形成を事例に―

The Frontier in Comparative Perspective
Urban Frontier of Kathmandu Valley ― A Case Study of Patan City ―

マハラジャン、ケシャブ・ラル(Maharajan, Keshav L..)

中世以来のパタンの町はネワールの町の特徴とされる地域構造、社会構造を保持しながらも拡大・重層化し、都市フロンティアとして外部者を呼び向かわせてきた。その際、20 世紀に振興された西部地域は、上位身分に連携する都市フロンティア、旧市街地が拡大し新旧の構造が混在する北部および東部地域は、都市的雑業に就労する流動住民を含む大衆の都市フロンティア、従来の町の構造に変化がみられない古都にあたる町の中心部は、異種の都市フロンティアとしての様相を提示している。

Abstract
Since the medieval period, Patan City has maintained historical characteristics that are considered to be unique to the town of Newar, such as regional and societal structures, and yet has expanded and become stratified, attracting outsiders to the city as a frontier. In the process, the western region, which was developed in the 20th century, has the appearance of a city frontier associated with upper classes; the northern region where the old city area expanded and old and new structures coexist combined with the eastern region appear to be a city frontier of the masses, including fluid inhabitants engaged in urban menial jobs; and the central part of the city, where the ancient capital was located without apparent structural changes, seems to represent a different type of city frontier.

「三田学会雑誌」95巻2号（2002年7月）

カトマンズ近郊の都市フロンティア

――パタン市の町形成を事例に――

マハラジャン，ケシャブ・ラル

要　　旨

中世以来のパタンの町はネワールの町の特徴とされる地域構造，社会構造を保持しながらも拡大・重層化し，都市フロンティアとして外部者を呼び向かわせきた。その際，20世紀に振興された西部地域は，上位身分に連携する都市フロンティア，旧市街地が拡大し新旧の構造が混在する北部および東部地域は，都会的雑業に就労する流動住民を含む大衆の都市フロンティア，従来の町の構造に変化がみられない古都にあたる町の中心部は，異種の都市フロンティアとしての様相を提示している。

キーワード

ネワールの町パタン，地域構造，社会構造，都市の拡大・重層化，都市フロンティア

1．はじめに

カトマンズ盆地内の重要な都市の一つであるパタン（ラリタプル）市は，ネパールでは首都カトマンズ市につぐ観光都市ポカラ市と産業都市ビラトナガル市と並ぶ大都市である。現在のパタン市は古都パタンを中心に発展した。古都パタンは中世マッラ時代に盆地内の有力な王朝として栄えた時に完成した。町作りは宮殿を中心に，職能や儀礼における役割別にカースト居住地を形成してきた側面と，それ以前（古代）から続くバハ・バヒ[(1)]を中心に宗教儀礼を含む生活文化を重視した居住地形成の両面をもち，いずれの場合でも町は，政治や経済（商業・流通）ではなく儀礼面を中心に構成され，社会の規範や理想の生活を現し，宇宙観・世界観，宗教観，社会観そのものを現すといわれる。本稿ではこのことを念頭におきながら町の地域及び社会構造を概念的に把握し，実情と照らし合わせる。さらに，ラナ時代末期における同市の世帯リストを活用し，これらの構造と地域住民のカースト構成及びその変容を確認し，都市化を含むそれ以後の変化を概観し，また1994年の総選挙における同市の投票者名簿を用い，市内の居住地の広がり方に照らしながら，今日的状況について可能な限り都市フロンティアの観点から考察する。[(2)]

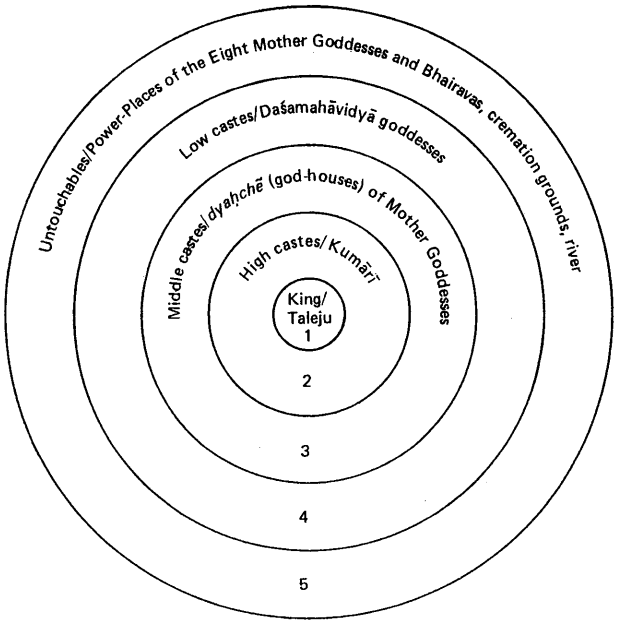
2．ネワールの町の構造

ネワールの町の構造には曼荼羅的宇宙観・世界観の要素があるといわれる。このモデルは大小のネワールの町の構造を分析する場合に活用される。このモデルによればネワールの町には明確な境界，強い求心力のある中心と，それに伴う序列があり，さらには宗教的シンボル（寺など），公共施設の幾何学的配置，町の区分け，町最大の祭りにおける山車・神輿巡行ルートの確立などの要素により，空間的秩序が保たれるといわれる。[(3)] プラダンによれば，地域構造を多様な儀礼や職能の面で支えるカースト住民もこの空間的秩序にうまく収まり，町の構造の序列が，そのままカースト社会の序列，権力構造，パトロン・クライアントなどの社会的関係にも反映されると概念化される。プラダンのカトマンズの調査に基づく概念図（図1）によれば，町の中心には位の高いタレジュ｛・バガヴァティ（ドゥルガ）｝神が祀られ，王（宮殿）が存在する。その周りにクマリ女神がおり，上位カーストの人々が住む。その周りには母神の神々の神家があり，中位カーストの人々が住んでいる。さらにその外周りに次の位の神々がおり，低位カーストの人々が住む。最後に，町の外界域にアシュタ・マトリカ（八人の母神）の神々やピータ（普段は生贄などをとらない位の高い神々の偶像が伴わず，石や木などで現す（密教的）象徴的姿で，生贄をとり，生や力の中心となる），ガート（火葬場），川があり，不可触民が住むとされる。クウィグリーは（パタンについてではないが）カースト間の関係において王・支配カーストを中心としたパトロン・クライアントの関係だけではなく，各カースト・グループが一つの中心を成し，その他のカーストと多様な関係をもち一つの完結したネ

（1） バハ，バヒとはともにサンスクリット語の「ヴィハーラ」から出た言葉で，一応「僧院」と訳し得る。大・小のディギ・チェン（仏舎利塔・仏像がまつられたり，僧侶の居住室があったり，金剛乗仏教（密教）の神々やアガン・デョ（リネージの神格）があったりする建物）を中心とする口の字型をした二階建の構造物からなる。バハ・バヒの周囲には僧侶・信者の住居をはじめ，その宗教儀礼を支える各カーストの人々の住居がある。特にバハの場合，隣接して広い中庭を抱え込む居住地があり，仏像,仏舎利塔，諸神の寺等が建てられ，周辺住民の生活の中心になっている。一般的にバヒの方がより古く，構造的に従来のヴィハーラ的要素を多く残し,その広い集会場は小中学校として活用されることが多い。バハの場合，1000年以上も継続的に宗教儀礼が行われているとされるものもあれば中世末期にできたとされるものもある。なお，バハ・バヒにおいて特別な儀式が行われる時や「ビハラ仏教」（上座部仏教）が展開される時はそれぞれが「**マハ・ビハラ」とよばれることがある。例：クァ・バハ—ヒランニャ・ヴァルナ・マハ・ビハラ。なお，詳細については，Locke 1980: 9-65 を参照。

（2） 本研究に関する現地調査において，（財）三菱財団の研究助成による共同研究「近・現代ネパールにおける村落および都市の社会・生活構造の変化の実証的研究」（研究代表：東京外国語大学教授石井溥）の助成をいただいた。本稿はその資料の一部をまとめたものであり，平成11年度～13年度の科学研究費補助金基盤研究（B）「フロンティア社会の地域間比較研究」（研究代表：京都大学東南アジア研究センター教授田中耕司）の成果の一部である。

（3） 詳細について，Gellner 1992: 41-52 を参照。



出所：Gellener 1992 (p.48)

図1　ネワールの町形成における理念図

ットワークをもつと概念化している。(4) これらの両モデルともネワール・ヒンドゥー社会を中心に据えた話だが，仏教色の濃いパタンの町にこれらの概念の適応が可能であるかどうか次節で考察する。

3．パタンの町の構造

古都パタンの町は周囲の田圃などの地域より約30m 高いところに位置しており，北のマノハラ・バグマティ川，西のバグマティ川，南のナック川，東のコダク川に囲まれている。これらの川と町の間には田畑が広がっており，町の食糧を賄う役割を担っている。町の中心地には宮殿があり王がいた。宮殿付近には大きい広場があり，様々な儀礼の執行場になっている。王はこれらの儀礼の強力なパトロンであった。宮殿付近にはタレジュ・バガヴァティを始めとしクリシュナ，シヴァ，ブランッマ（ブラフマー）など位の高い神々の寺もところ狭しと並んでいる。近くにはヒティ（共同石水道）もあり水不足を感じることはない。宮殿一帯の近辺には多くの上位カースト（デョバルム，

（4） 詳細に付いて，Gellner and Quigley 1995: 298-324 を参照。

セショー）だけではなくカースト序列で最下位の不可触民のポー・チャムカラー以外の儀礼進行に役割を果し得る諸カーストの人々も住んでおり，町には強い求心力のある中心があることを確認することができる（なお，パタン市におけるカーストの構成・分類については表1を参照）。

特に中世においては都市国家だっただけに象徴的「町壁」（城壁）が存在し明確な境界があり，四方に（象徴的）門が存在し，中心と境界の間に一定の序列及び固まりをもって諸カーストの人々が住んでいる（図2）。不可触民の人々は町界の外域に住んでいる。町域内に無数にある寺などには一定の序列がみられ，例外もあるが，位の高い神格は比較的に町の中央にある。町域外にはアシュタ・マトリカの神々（寺が建てられているのが5個所で毎日多くの人々がお参りする，後の三つには象徴的なものしかなく特定の祭礼にのみ参られる）があり，町を守る役割を担っているといわれる。多くの祭礼にはこの神々が不浄なものを浄化する意味ももっていて，ジャンマ・ディン・プジャ（誕生日の礼拝）には「厄払い」の役も担う。四方の川に火葬場デパ（ガート）—東のクゥチェン（バラクマリ），北のサンカムル，西のイェッパ，南のナック—があり，それぞれの川に遺灰などが流される。これらの川はバグマティ川に一本化され，チョバールのさらに南からカトマンズ盆地を出て，北インドでガンジス川に合流し海へと流れて行く。

さらに，パタンにはネワール仏教徒（僧侶の母体となる上位カースト）が非常に多く（その全人口に対する割合はカトマンズ盆地内の三つの町中一番多い），バハ・バヒを中心に住んでおり，一つの完結した地域・社会構造をつくりだしている。大小を合わせるとパタンの町のバハ・バヒの数は164にもなる。

町の全地域はガネサ（聖天）寺（必ず鐘がついている）によって地縁的に束ねられる約100のトゥー（家・同族，親族が中心に住む地域で，町の中の「むら」と称する研究者もいる）に区分され，各トゥーは町内や大字的性格をもち，ジャプやバレ・グバジュのように数的に大きいカースト・グループが支配的存在となる場合と数個の少数カースト・グループが同一トゥーに住み，一つの地域・社会構造を成す場合がある。その際，下位カーストのナェはあまり他のカーストとは交わらず，多くの場合町界付近に固まり独自のトゥーをつくる。不可触民のグループは常に町界域外に住む。各カースト・グループは数個の父系親族集団から成り，それぞれが神格をもつ。トゥーには少なくとも一つのヒティないし池，数個の井戸，一つのツァパー（公民館），一つのファルツァ（共同作業・休憩場，大きいトゥーには複数），（象徴的な）門，ツォワサ（不浄なものの捨て場），公衆便所，ラチ（広場），数個の仏舎利塔，ナニ（中庭を囲む住居地で構造的にバハに類似しているが神室がない），ツカ（ナニより小さい中庭を囲む住居地）があるのが普通である。バハ・バヒのあるトゥーの名にはバハ・バヒの名が使われる。町の四方には仏塔（北のものは変形している）も配置され，仏教上も幾何学的配置，空間的序列・秩序がみられる。多くの神々はヒンドゥー，仏教の両宗教の中に取り入れられ，それぞれの中で位置付けがされている。これらの神々は，定期的に礼拝され，多くの場合特別な儀礼をもって年中行事において祭られる。

表1　パタン市におけるカースト（含む民族）区分

カーストの位	記号	ネワール語名称	儀礼上の役割	カースト的職能・代表的職業	含まれるタル（名字）
ネワール（系）民族）					
上位グループ	na	バレ・グバジュ	仏教の僧侶・司祭	金銀細工, 大工, 石細工	サキャ, サキャ・ビクチュ, サキャ・ムニ, バダ, アナガリク, ダクァ, バジュラチャルヤ
	nb	デョバルム	ヒンドゥー教の司祭		ラジョパデヤ
	nb	セショー	占星術師, ヒンドゥー教司祭	旧支配層, 商人, 行政官	シュレスタ, マッラ, ジョシ, アマテ, ラジバンダリ, バイデ, プラダン, カルマチャルヤ, ムルミ, マレク
	nc1	ジャプ	一部大衆神の司祭	農民，屋根ぶき	マハラジャン，ダンゴル，シン
		クマー		土器作り，大工	アワレ，プラジャパティ，クマレ
	nd1	タモ等		銅細工，菓子作り，真鍮細工，大工	タムラカル，シルパカル，ラジカルニカル，バハネカル，バラヒ，シカルミ
中位グループ	nc2	クサー	ナェの司祭	農業, 機織り, 米屋	タンドゥカル
		テペ		農業	ベンジャンカル，サンガ
	nd2	プン		お面作り	チトラカル
		チパ，バー		染め屋	ランジトカル，カランジト
		サェミ		油絞り屋	マナンダル
		ガトゥ		園芸，花屋	マリ，マラカル
		ナウ	散髪，爪切り	散髪屋	ナピト
		カウ		鍛冶屋	ナカルミ
		クル		太鼓作り	クル
		ドビ		洗濯屋	ドビ，ラジャク
下位グループ	ne	ナェ	太鼓たたき, 臍の緒切り, 中位カーストの爪切り	肉屋，牛乳屋	カダギ，サヒ，カサイ
		ジュギ	笛吹き, 不浄を浄化, 一部大衆神の司祭	仕立て屋	カパリ，ジュギ，クスレ，ダルシャンダリ
不可触民	nf	ポー・チャムカラー	不浄を浄化, 町界域母神の司祭	漁夫，掃除屋	ポデ，チャメ
その他の民族					含まれるヒンドゥー・カースト及び諸民族
上位グループ	pa	バルム	ヒンドゥー教の司祭	行政官，農業	バルバテ・バフン, タライ・バフン, ギリ, マハンタ
	pb1	カェン		軍人，農業	チェトリ，ハマル
	pb2	ラナカラー		支配層，大地主	ラナ，シャハ，タクリ
下位グループ	pc	サェン		軍人, 農業, 商人, 日雇労働者	タマン, グルン, マガル, ボテ, ラマ, ナガルコティ
	pd	マルシャ		商人, 行商, 日雇労働者	ムスルマン, マルワディ, シーク, ビハリ
	pe	アングレジ			白人（ムレシュ）
不可触民	pf	カミ		鍛冶屋	カミ
		ダマイ	音楽屋	仕立て屋，音楽屋	ダマイ
		サルキ		靴屋	サルキ

注：1）バレ・グバジュのグループは，一般的にバレといわれ，仏教の僧侶・司祭をグバジュ（グルジュ）といわれるが，尊敬・敬語として普通にもグバジュが用いられる。僧侶・司祭には，バジュラチャルヤ，サキャの各タルの人が相応の通過儀礼を経て資格を持っていればなれるので，カースト・グループ名とタル名を一様に対応しないが，バジュラチャルヤはグバジュ，サキャ，サキャ・ビクチュ，サキャ・ムニ（現在，サキャとしか名乗らないことが多い）はバレとされることがある。

出所：田中，吉埼　1998（p.261）

図 2　パタン市の概念図

パタンの町には千年以上も続いているカルナマエ（観音，ラート・マツェンドラナート）の祭りがある。豊作祈願の意味もあるこの祭りは，数日間にもわたりその山車が町内を巡行し，町をあげて祝われる。山車の巡行ルートは明確に決められ，山車が停泊中その近辺のトゥーの主たる祝い日になる。この祭りを祝う地域・トゥーにより町は明確に三区分にされる。この祭りはパタンの町の地域・社会構造及びその秩序を再認識・再生産する絶好の儀礼になっている。儀礼執行上，町を区分することができる祭りにはデ（ディグデョ（リネージの神））・プジャ（供養）（金剛乗仏教の場合デシ・プジャ（密教神格の供養）も），イェンヤ・プニ（ガネサやクマリ（少女の生き神）他の神を供養する満月日）があげられる。イェンヤ・プニの場合，町は三区分から派生した四区分に分けられる。

その他に，サパル（死者供養）の祭りにおける行列の町巡行ルート等も確定されている。多くのヒンドゥー的祭りの巡行始点は宮殿の広場となる。その代表的な祭りにはクリシュナ・プジャ（クリシュナ神の供養の祭り）がある。仏教的色彩が強い祭りの場合，祭りの組織・運行は当番制で，巡行の集合・始発点は当番のトゥー・バハとなる。その代表的な祭りにはマタヤ（死者供養，「灯明の祭り」）があり，その巡行ルートも確定されている。バハ・プジャ（仏の供養）などの祭りの巡行ルートはマタヤに準じる。

出所：Patan Conservation and Development Programme による原図を基に筆者が作成。
注：数字はブロック番号を示す。□になっている部分はバハ・バビである。

図3　古都パタンにおける地域構造

農民たるジャプ・クマーは上位カースト(5)でありながら，農業を生業とし，それを誇りしている。彼等は，一部の学者からは古代から住んでいるパタンの先住民とされ，彼ら自身も他のカースト・グループと異なり，自分らの帰属心はパタンにしかもとめず，数的にも一番多い。しかしながら，近代教育や制度活用等の面で，近代化に慣れるのが他の上位カースト・グループに後れを取り粗野とみなされ，比較的農地の近くに住んでいるということも含め，彼等の多くは町の境界付近，とりわけ東部，西部と北部の境界付近に住んでいる。このカースト・グループは農業社会で最も付加価

(5)　このカースト・グループは通過儀礼で聖紐を受ける必要がないということで中位グループに分類されることもあるが，ここは石井1978にならった。なお，例は少ないがパタンでも儀礼進行上の役割によって聖紐を受ける人もいる。また，盆地の南部のファルピン町には聖紐を通過儀礼で受けるジャプがいる。

値を産む集団で，数も圧倒的に多く，町全体が彼等によって養われていたといっても過言ではない。そして，多くの場合彼等自身が祭りや儀礼のザェマン（パトロン，ジャジマン，ヤジャマーナ）となり儀礼を執行し，他のカーストの色々なサービスを受ける。このことは詳細な違いがあるが他のカースト・グループについてもいえる。とりわけ，銅細工，大工，菓子作り，石工等多様な職業をもって物を作るタモ（銅細工師）等のカースト・グループも同位とされ，多様な儀礼のパトロンとなる。

通過儀礼においては他の低位カーストも互いにサービスを受け合ったりする。特に不浄とされるものの整理・浄化のためにはより低位のカーストのサービスが必要である。低位カーストでは，オジ・オバ，兄・姉など親族のキー・メンバーがその役を担うことも多い。

パタンの町における以上の地域構造・社会構造は中世マッラ王朝時代に完成され，その最盛期には最大に機能していたと考えられる。仏教の色彩が濃いネワールの町であるパタンにおけるこの構造は，上述したヒンドゥー社会を中心に据えたネワールの町における両モデルの概念的構造と一致する点が多いといえる。要素によってはその地域構造・社会構造はより洗礼されているともいえる。このことを念頭に，その姿を保持している古都パタンの住民のカースト別の居住地を平面図にしたものが図3である。

4．近代における町の構造と変化：都市フロンティアとしての理解に向けて

パタンの町に大きな変化が訪れるのは，近世シャハ王朝，ラナ時代（1846-1950）に入ってからであり，その形は近年に至るまで引き継がれている。とりわけ，独裁政権を握るラナの首相はその一族のために町の西部の土地を取り上げ，私物化し，西欧風の宮殿・豪邸を造った。ラナの宮殿を中心とするこの一帯は古都パタンの町とは連続性をもたず，ラナの人々もまた一般の町民とは別格で町の拡大した部分は全体的に別の世界であった。

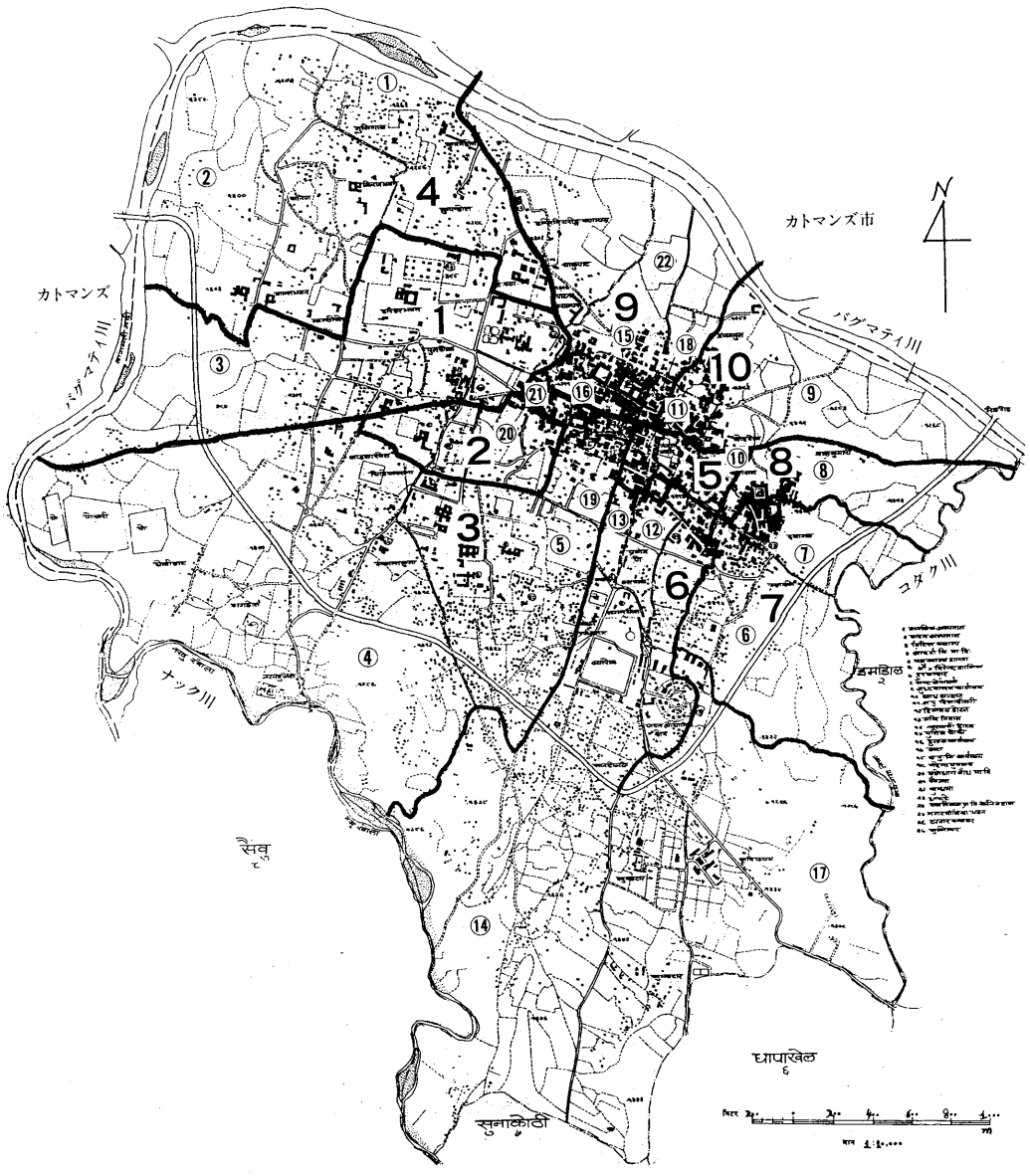
また，ラナの政権掌握とともに多くのパルバテ・ヒンドゥーを始めとする他の民族の人々も近辺に流入してきた。彼らの多くは軍人（チェトリの他にマガル，グルン，タマンなどのチベット・ビルマ語系諸民族も含む），行政官，バフン・プロヒト（ヒンドゥー司祭），一連の使用人，職業的サービスを提供するカミ，ダマイ，サルキの不可触民である。その他，外部からの流入者として，キリスト教伝道者・教団外の西洋人，シーク，マルワリなどの一部インド・アーリア語系民族がある。彼等は町の西部に住み，一部は南部に住み着いた。ジュッダ・シャムシェル・ラナ首相（1932-45）の時代に町の西南部（ザウラケル）に宮殿を構えたことが一連の流入をさらに促進した。この新興地域と古都地域は町の機能上も住民構成上もまったく異なり，一つの町として把握するのは難しい。ただし，町の北西部のバグマティ川沿いに広がっているネワールの中・低位カーストの人々の居住地は別扱いする必要があろう。

もう一つの大きな変化は，1913年にカトマンズ市に一年先駆けて，町の公衆保健衛生センターともいうべきチェムダル・アッダ（サファイ・アッダともいわれる）が設立されたことに関連する一連の変化である。この事務所が所轄する仕事の内容は，町の掃除，道路，水路，開渠下水道，溜め池の掃除，有機物の収集，生ま物（肉）販売店の衛生指導，野良犬，猿退治，家畜の放し飼いの制御である。不可触民のポー・チャムカラーは清掃関係の一連の作業の担い手となった。またその事務所は，マッラ王がいなくなってからも象徴的・儀礼的中心であり続け，いまだに強い求心力をもつ旧王宮広場の一角（旧宮殿の一室）に設けられた。やがてこの事務所が町の基本的な資料—寺，公共施設の数，トゥー，地域ごとの建物の数・種類等を把握するようになる。そして伝染病のワクチン，建物税の収集，罰金を課すことなども実施し始める。この事務所のサービスを町の北西部の新興地域も必要とし，それを媒介として次第に両地域の関係が成り立ってきたと推測される。第一回目の町の人口調査もこの事務所が実施し，次第に町役場的機能を具備していくようになる。次に，このように変容する町の地域構造，住民のカースト構成を，ラリタプル市として両地域を含む建物・世帯主のリスト（1940）を用いて把握する。用いるネパール語の資料は，『ビクラム・サンバタ1996サルコ ガル・サンキャコ・ラガタ—ラリタプル（ビクラム暦[6]1996（1940）年の家屋・世帯調査—ラリタプル市）』である。

同資料におけるラリタプル市とは，北はマノナハラ・バグマティ川，西はバグマティ川，南はナック川，東はコダク川に囲まれた地域で，古都パタンの町，新興地域，その間の田畑が含まれ，ほぼ現在のラリタプル（パタン）市に匹敵する。市は10のブロック（区）に分けられ（図4），各区におけるパッカ（少なくとも焼成レンガの壁に木製ドアや窓，瓦の屋根付き）やカッチャ（日干し煉瓦の壁に木製ドア・窓，カル草・稲藁ぶき屋根）建造物の数及びその世帯主の名前とカースト（タル（名字）や民族），ツァパー・ファルツァ，寺の数及び分かりうる範囲での神室の記入がある。ネワール及びパルバテ・ヒンドゥー，その他の民族の同じようなカーストを一つのグループとし，上・中・下位別に整理し，各グループの（世俗的）職能（職業），儀礼的役割を付したのが表1である。

市全体で建造物は7,346軒あった。その内6,753（92%）軒が家で，パッカが5,880（80%）軒，カッチャが873（12%）軒で，古都の町内域の町並み風景はほとんど前者から成っている。後者は新興地域に当たるブロック—1，2の田畑の間にあるネワール以外の人々の建物に多い（表2）。ネワールのカッチャ建物は低位カースト・不可触民のもので町界域に多い。残りの建造物の内403（5.5%）はツァパー・ファルツァで，135（1.8%）は寺で，55軒のアガン・チェン（神室）も加えると寺などは全体の2.5%にのぼる。旧宮殿があるブロック—5ではその数は37で，同ブロックの全建造物の5%にもなる。居住建造物（普通の家）はナニ・ツカなどで複雑に入り込んでおり外部者にはわかりにくいという状況を考えると，よくいわれる「カトマンズ盆地のネワールの町には

（6） ビクラム暦は紀元前57年を基年とする暦で，現ネパールで公式に用いられている。



出所：ラリタプル市所持の地図を基に筆者が作成。
注：現在のヲダを①の数字で表示，旧ブロックを１の数字で表示。

図４　現在のラリタプル（パタン）市のヲダ別地図

家よりも寺の数，人よりも神仏像の数が多い」という表現もうなずける。それと逆に新興地域には寺の数は非常に少ない。また，新興地域が加わったため，市全体でトゥー・地域（名）は110に増えた。

表 2　1940年パタン市におけるブロックごとの建造物及び世帯数

区分	ブロック1	ブロック2	ブロック3	ブロック4	ブロック5	ブロック6	ブロック7	ブロック8	ブロック9	ブロック10	計
トワーの数	16	12	19	7	10	14	5	6	12	9	110
家パッカ	445	136	925	667	715	578	622	575	530	687	5880
家カッチャ	243	434	8	3	15	73	20	8	66	3	873
家の合計	688	570	933	670	730	651	642	583	596	690	6753
ファルツァ等	34	24	39	34	37	40	41	32	73	49	403
寺	7	2	17	7	35	14	15	10	18	10	135
神屋	6	6	5	1	2	17	2	5	9	2	55
建造物計	735	602	994	712	804	722	700	630	696	751	7346
世帯数	682	564	928	669	728	634	640	578	587	688	6698
世帯の記号別カースト分類（%）											
na	8.4	0.9	38.3	39.6	17	40.4	7.7	23.2	22.5	7.7	21.3
nb	13.2	3.6	25.9	28.7	27.7	15.1	15.8	5.9	34.1	8.6	18.4
nc1	26.2	7.3	29	25.6	18	11.5	69.2	65.6	13.8	57.4	32.3
nc2	6.9	2.1	0.5	—	1	—	—	—	8.5	16.4	3.5
nd1	—	0.5	1.8	2.5	26.6	2.4	—	0.2	0.3	—	3.7
nd2	1.3	6	2.6	1.9	8.6	13.7	3.4	1.6	3.1	3.1	4.5
ne	5.1	4.8	1.3	0.8	0.3	5.1	0.3	3.3	11.8	4.9	3.5
nf	0.6	0.7	—	—	0.1	3.9	3.1	0.4	4.9	—	1.3
pa	8.7	7.5	0.2	0.3	0.1	1.9	—	—	0.3	0.4	1.8
pb1	17.3	39.2	0.1	—	0.1	2.5	0.5	—	0.5	0.9	5.5
pb2	6	3.9	—	—	—	0.2	—	—	0.2	—	1
pc	5.4	15.4	—	—	—	2.7	—	—	—	0.6	2.2
pd	0.2	—	0.3	0.6	0.3	0.2	—	—	—	—	0.2
pe	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
pf	0.7	8.2	—	—	—	0.5	—	—	—	—	0.8

注：1）資料：ラリタプル市内部資料『ビクラム・サンバタ1996サルコ・ガル・サンキャコ・ラガタ—ラリタプル（ビクラム暦1996（1940）年の家屋・世帯調査—ラリタプル）』
2）カーストの記号については，表1を参照。

各家の世帯主のカーストのグループをみれば，ジャプ・クマーのグループがぬきんでて多く全体の3割強にものぼる。各ブロックに1割以上いるこのグループは東部のブロック—7，8には7割近く，北部のブロック—10にも6割近く，西部の各ブロックでは3割近くいる。仏教の僧侶母体となるバレ・グバジュのグループはそれに継いで多く，全体の2割強になる。新興地域のブロック—2を除けばこのグループも軒並み各ブロックに1割以上いる。とりわけ，バハ・バヒが多いブロック—3，4，6にはそれぞれ4割もいる。その次にくるのがセショー・デョバルムのグループで全体の2割近くいる。このグループもブロック—2を除けば各ブロックに1割以上いるが，やはり旧王宮のあるブロック—5，それに隣接する町の中心域，ブロック—3，4，9にそれぞれ3割前後がいる。結局この三つの上位カースト・グループで全体の7割以上も占め，支配的グループになっ

ている。もう一つの上位カースト・グループのタモ等は全体の4％近くしかなくブロック—5に集中している。中位サービスカースト・グループのクサー・テペ，プン・バー・ナウ・カウ等も4％前後しかいない。前者は農民的性格が強く田畑が広がるブロック—1，9，10の境界域に集中している。後者のグループは，そのサービスをどのカーストも必要とするので，ブロック—5にやや多いが全ブロックに分散している。

下位カーストで可触だが彼等の手から上位カーストは水は飲めないというナェ・ジュギ等のグループは全体の4％にも満たず，ブロック—9の町の境界域に集中しており，残りもやはりブロック—1，2，6，8，10の各境界域に分散している。不可触民のポー・チャムカラーの数は全体の1％強に過ぎない。彼等はかつては町界域内に住むことが許されていなかったこともあり，ブロック—6，7，9の町界域外に多く見られる。

ネワール以外の世帯は全体の1割程度で，そのほとんどが新興地域のブロック—1，2，一部はブロック—6の新住宅地域に住んでいる。また，その数の半分（全体の5％強）はカェン（パルバテ・ヒンドゥーのチェトリ）で，ブロック—2，1に集中している。同じくチェトリのグループに入るが，20世紀半ばまでネパールを独裁的に支配し，その後も色々な面で絶大な影響力を行使しているラナは，本市では特別視されることと，本資料作成時にラナ首相の邸宅が本市にあったことを考慮し，ラナ・カラー（一族）は別のグループとして検討したが，その数は全体の1％に過ぎず，やはりブロック—1，2にほぼ限られている。バルム（バフン，パルバテ・ヒンドゥーの司祭カースト。なお，便宜的にこのグループにそれぞれ数軒ある南部タライのバフン，ギリ，マハンタ等の世捨て人・聖人（の俗世間）の子孫も含めた）も全体の2％未満で，散発的に他のブロックにもみられるが基本的にブロック—1，2に集中している。サェン（チベット・ビルマ語系諸民族）のグループもほとんどがもとは軍人・使用人として流入してきたため，カェンと類似した傾向を見せる。マルシャ（南部出身のインド・アーリア語系諸民族）は数軒しかないが，古くから女性装飾品を取り扱うムスリム商人がブロック—3，4，5中心に町の中に住んでいる。アングレジ（西洋人）は，キリスト教の伝道者・教団外の人が町の西部に拠点を構え，医療や教育活動を行ってきたが家を構えて外国人居住地を形成するほどではないようである。不可触民の職業カーストのカミ，ダマイ，サルキ等は全体の1％にもならないがカェンと同様，基本的にブロック—1，2，6に住んでいる。

以上，パタンの町は近代に入ってから時の勢力や支配者の意向も取りいれた形で都市的フロンティアになり町が拡大し，支配者，その宮殿・邸宅，関連する多くの人々を受け入れ，新興地域を町の一部とし，ラリタプル（パタン）市に変容した。だが，1940年の時点で，ネワール以外の流入人口の世帯は全体の1割に満たず，それもほとんど新興地域に限定されていた。この時点において都市的フロンティア性を持ち，人々を向かわせたのはパタン市の新興地域であり，そこに限定されるといえよう。

古都パタンでは，中世のように強力なパトロンとなる王がいなくなっても中心地は強い求心力を

保持しており，その地域構造・社会構造はほとんど変わらず，住民のカースト構成及び町内におけるその主たる居住地もほとんど変化していない。さらに，カースト間の関係，種々の儀礼執行における各カーストの役割も基本的に変わっていない。この時点において古都パタンは人々を向かわせるほどのフロンティア的性格はなかったといえよう。次節では，さらに半世紀経過した今日においてその構造がどう変容したのかについて検討する。

5．近年における変化：都市フロンティアの確認に向けて

5.1　町・家の構造における変化

パタン市は，ラナ専制から独立した間もない1950年代にはラリタプル・ナガルパリカ，パンチャヤタ時代（1961-1989）にはラリタプル・ナガルパンチャヤタ，民主化時代（1990-）には再びラリタプル・ナガルパリカ，さらに1995年にはラリタプル・ウパマハナガルパリカ（sub-municipality）と，時の政治体制によって名づけられた。そして近年には，東南部の農村の一部を吸収合併し面積も拡大した。その過程でチェムダル・アッダが市役所に発展的解消した。市の区分もブロックからヲダ（ワード）に変わり，現在市全体が22ヲダに区分され，かつての10のブロックがその中に再編されている（図4）。1991年の人口調査によるデータによれば同市の世帯数は20,630で人口は115,865人である。その増加は，1940年から半世紀立った時点で市全体としての自然増，他の地域・国からの移入及び周辺農村の吸収合併によるものである。しかし古都の市街地での世帯の増え方と新興地域におけるそれとはまったく異なる。古都の市街地では，世帯が増えるというのは人口（家族）の自然増等により従来の住民が分家し，新居を構える時である。それは多くの場合，旧家の近辺にある庭・裏庭，空き地に新しい家を建てることで，結果的により密集した，建物同士が完全に密着した住居地を形成することになる。そのような庭などを持っていない人は家を壁などで仕切って，階段を増設し，（新）別居を構える。旧家を仕分けし階段をつけるほどの面積が無い場合，階ごとに分けて住む。いずれの場合も市街地の世帯・人口密度をかなり上げることになる。それを幾分かでも解消するように，古い家を改・増築する際に従来の３・４階建てから５・６階建てへと高層化する例も最近多い。このような改築にはセメントなどが使われ，屋根にもトタンが使用されるか，屋根をなくし雨漏れしないような造りでカーシ（他目的利用可能な屋上広場）を作り，物干し，洗濯，余暇を過ごす場，子供の遊び場，家庭菜園などとして利用される。いずれの場合も従来の町並み風景とは異質なものになる。そして，数は少ないが，より「近代」的生活を求め，余裕のある人は郊外の方へ脱出することもある。彼らの脱出によってできる空家には商業や都会的雑業に従事する人々が宿借・間借りで流入することがある。

新興地域の場合，比較的裕福な人が古都の市街地ないしその他の地域（外国も含む）から来て新しい家を建設し，そこに新居を構えるという形で世帯が増える。ここで建てられる家は，庭付き一

戸建て「バンガラ，バンガロー」の形式をとり，鉄筋・鉄骨，コンクリートを使い，多くは2階建てで屋上の全部ないし一部をカーシになる。壁で区切られる敷地内には花園，家庭菜園，駐車場，門番（使用人）室，犬小屋もあることが多い。このような家にはしばしば家主が住まず，外国人その他の個人・組織に貸し，高級住宅街化されることもある。このような地域には各国の大使館・領事館，援助機関，非営利団体の事務所などが入居することが多い。とりわけ，町の西部及び西南部にその傾向が強い。また，旧ラナの豪邸・宮殿は大きく，敷地も広いため，それを買ったり，借りたりし，国際機関を含む外国の大きな機関（国連のネパール事務所，イギリスやスイスの援助機関のネパール事務所，日本の大使館員の公邸など），ネパール政府・民間関係施設（農業省，灌漑省，供給省，大臣公邸，公務員研修所，サジャ（政府経営）バスパーク，国立病院，学校，大学，郡庁，地方裁判所，軍の駐屯地，グルカ兵の居住地，動物園，チベット難民収容所など）がこの一帯に立地してきた。西部及び西南部は新興の歴史も長く，それが定着し，パタン市の高級街としてのイメージを形成している。

それに対し，1960年代以降になって新興され居住地ができた北部の方はもっぱら住宅が多い。一部はネパール人を中心に賃貸されるが，所有者が自ら住む場合がほとんどである。この新興地には旧市街地からはじき出された比較的に富裕な人が多く関わり，市街地の延長としての性格を持ち合わせ，一定の連続性をもつ。市街地の隣接域には庭付き一戸建ての家と旧市街地の軒を連ねた家屋が混在している。このことは西部・南西部には見られない現象である。旧市街地から居住を変わった人たちは元の住居を外部から市内に移入し都会的雑業に従事する人々に賃貸することがある。

さらに，市街地全体が拡大する1980年代に新興される東部の方もその家作り及び利用において北部的性格をもつ。ただし，ここはその後も隣接する農村を合併し面積が拡大しているため，スポーツセンター，映画館，縫製工場，学校，私立病院なども立地させている。また，ここには以前から国営農業試験所もある。このような市街地の拡大によって古都の町境界域ももはや境界ではなくなり，市の重要な拠点となっている。特に西部，南部においてそのような現象が見られる。また，新興地域では市街地に比べ面積当たりの世帯数は少ない。

5.2　社会構造の変化

上記のパタン市の古都の部分の市街地と東西南北の新興地域における地域構造の変化を踏まえ，それぞれの地域の幾つかのヲダを選定し，その社会構造，とりわけ住民のカースト構成について考察を行う。その際，住民の居住地であるトゥー・地域及びタル（名字）の基礎資料として同市の1994における世帯ごとのネパール語の投票者名簿，ニルバチャン・アヨグ（選挙管理局）『マタダタ・ナマウォリ—2051サル，ラリタプル・ジッラ，ラリタプル（投票者名簿—ビクラム暦2051（1994）年，ラリタプル郡，ラリタプル市）』スリ・パンチコ・サルカル（ネパール政府）を活用する。

まずは，古都の市街地の代表的ヲダとして旧宮殿広場に隣接し南部に広がるヲダ12を選定した。

表3　1994年パタン市におけるサンプルワードの投票者数

区分	ヲダ2	ヲダ3	ヲダ6	ヲダ7	ヲダ12
世帯数	552	1051	740	730	599
投票者数	2313	4328	2842	3601	2934
投票者の記号別カースト分類（%）					
na	2.8	8.3	53	16.8	31.9
nb	23.5	20	17.4	8.4	11
nc1	5	20.2	13	69.6	15
nc2	10.4	—	0.2	0.6	—
nd1	1.7	1.2	2.5	0.2	23.5
nd2	2	7.3	2.3	2.1	5.5
ne	1.2	—	4.3	0.7	4.5
nf	—	—	—	1.1	2.1
pa	26.7	11.6	2.8	0.4	0.4
pb1	16.5	20.8	1.8	0.1	4.1
pb2	4.9	2.2	0.5	—	0.2
pc	2.2	6.5	2.3	0.06	1.1
pd	2.7	1.7	—	—	0.6
pe	—	0.2	—	—	—
pf	0.4	0.02	—	—	0.1

注：1）資料：ニルバチャン・アヨグ（選挙管理局）『マタダタ・ナマウォリー2051サル，ラリタプル・ジッラ（投票者名簿—1994年，ラリタプル郡）』スリ・パチンコ・サルカル，ネパール（ネパール政府）。（ネパール語）
2）カーストの記号については，表1を参照。

このヲダは基本的に1940年におけるブロック－6と，隣接する新興地域の一部に旧宮殿があるブロック－5の南方の一部を加えた地域からなっている（図3，4）。このヲダの住民のカースト構成を投票者数でみると，3割はバレ・グバジュのグループが占めており，セショー・デョバルム及びジャプ・クマーのグループを合わせると約6割を占め，従来のブロック－6と同様な構造を示している（表3）。また，この時点でこのヲダにタモ等の割合が高くなっているが，これは従来のブロック－5の一部が編入され，その住民がこのヲダに加えられたことからくるものである。これに対して多様なカーストの連合的性格を見せるプン・バー・ガトゥ，カウ，ナウ等のグループは割合で三分の一近く減少している。これには二つの理由が考えられる。一つはブロック－6の地域で現在のヲダ6に当たる部分に当グループの人たち，とりわけカウが多く住んでおり，彼等が本ヲダには算定されなかったことである。もう一つは，一般的にこのグループの多くの人々は従来のカースト的職業，儀礼執行における役割を担わなくなりつつあり，移住したりすることがある。その過程で一部の彼等はセショーのグループのタルを名乗ることもあるといわれている。このような現象も社会構成における彼等の割合を減らすことになっていると考えられる。その他のカースト・グループ

の構成においては，1940年の状況と著しく異なる点は見当たらない。なお，この構成は世帯数の割合で見ても類似した傾向を示している。つまり，このヲダは近年における一連の変化の影響を受け，カースト間の関係には多少の変化は見られるものの，その基本的な関係，種々の儀礼進行における各カーストの役割も再生・培養され，一種のインボリューションの現象を持ち合わせ，もう一つの都市フロンティアを提示していると理解されよう。このことは古都の中心地域全般についてもいえる。

次に西部の新興地域について検討する。ここで選定したのはヲダ2と3である。この二つのヲダはラナの豪邸を含む従来のブロック－1の大部分を占める。ここでは，ネワールのセショーのグループが2割以上で一番多く，カェンのグループがそれに続く。後者は従来の割合を維持しているのに過ぎないことに対して前者はその割合を1.5倍も増している。彼等のほとんどが盆地内の三つの旧市街地を窮屈と感じ新居を構え，移住する人たちである。同様に，バルムはその割合を従来の倍近く増やしている。多くの彼等は盆地外から，時には芋づる式的に来て，安定的職を手にし定着する。数は少ないがプン等のグループ（とりわけ洗濯屋のカースト）も顕著に増えている。マルシャのグループも全体的に僅かな割合だが倍増している。それはこの地域にシークの寺院があり，多くのシーク教徒が住んでいること，一部金持ちのインド系商人のマルワリも一部高級住宅街に住んでいること，東北部のバグマティ川の近くには行商などで生活を営むタライ・インド系の人々が多く住んでいること，などによるものだと思われる。なお，アングレジの人々も（2世帯，10人）有権者としてここに住みついていることがわかる。これは多いのか少ないのか，にわかに判断しかねるが，前節で述べたようにかなり昔から伝道者，教育関係者，医療関係者として住んできた地域でもあるので，ネパールの帰化法の障害の有無に関わらず，ある意味では自然な数かもしれない。ジャプ・クマーのグループは世帯数（投票者，人口）を減らしているわけではないが，その他のグループが圧倒的に増えているため，その割合は半減してしまっている。バレ・グバジュ，クサー・テペ，ラナ・カラーのグループさらにはサェンのグループについても同じようなことがいえる。ネワールの下位カーストや不可触民のグループの変化については重層的・複雑な理由が考えられるが，後述する東部の新興地域のような状況はここでもあると考えられ，全体的に彼等の割合の減少につながっているといえる。この地域は全体的に高級コスモポリタン的要素を含有し，高級住宅地，高級就職先及びそれを支える下部組織への就労先として人々を呼び向かわせているフロンティアに近年なりつつあると理解されよう。この現象は市の西部，西南部で全般的にみられる。

最後に東部の新興地域について検討する。ここで選定したのはヲダ6と7である。ヲダ6は従来のブロック－6の市街地及びブロック－7の一部からなっている。このヲダの投票者のカースト構成をみると，バレ・グバジュのグループが圧倒的に多く5割を超え，セショー，ジャプ・クマーのグループがそれに続く。この三つのグループを合わせれば全体の8割を超え，従来のブロック－6と類似した構造を見せる。プン等のグループが減少している理由は上記ヲダ12で述べたことと同様

に理解できる。不可触民のポー・チャムカラー及びダマイ等のグループは元々もその数が少なかったがこの時点ではいなくなってしまっているのは明らかに彼等がより住みやすい場所へ移住してしまったことによるものである。その背景には，今の町で彼等が生活を維持できるほどの仕事（儀礼上の役割やカースト的職業も合わせて）が無くなり，法的・制度的に差別が無くされたとしても（地域）社会に差別意識がはびこり，彼等がただ差別の対象だけになる状況もあり，そこから逃れたいという彼等の願いがあると理解される。その行き先は農村部や隣の郡が多いようであるがカトマンズやタライのバザルなどに非定着的に住み，手当たり次第の仕事に就くこともある。また，元々町の界外域に住む彼等が町の拡大により住む場所をなくしたとも考えられる。もちろん，中には市街地の狭い土地を市価で売却し，郊外などへより快適な場所を求めて移出する場合もある。彼らのこのような行動は異なる場所でまた別のフロンティアの存在を暗に示す現象だと理解できる。

ヲダ―7の地域は従来のブロック－7の大半及びブロック－8の一部（一つの大きなバハ）に該当する。このヲダではジャプが7割を占め，バレ・グバジュ，セショーと合わせると9割以上になる。この構造は従来の構造と基本的に変わっていない。ただし，バレ・グバジュとセショーのグループの割合が逆転しているのはブロック－8のバハの編入によるものである。そして従来いなかったカースト・グループが散発的に見られるようになったのはその区域内の新興地域に他所から新しく入居してきたものだと理解される。それにしてもネワール以外の下位カーストや不可触民は依然見られない。ネワールの下位カーストの人々の割合も減少傾向にあるのは，別のフロンティアで成功する可能性がある彼等が上述した差別構造から免れるために移出することからくるもので，ヲダ―6で述べたことと同じ現象である。

なお，この両ヲダを合わせた地域は，旧市街地も一定に変容し，中産階級の住宅地，工業地帯，大衆娯楽地，向都民に対する中継地，全体を支える下部構造の居住地・就労先として人々を呼び向かわせるフロンティア性を持ち合わせているといえる。なお，このことは市の東部および北部全般についてもいえる。

6．まとめ

中世マッラ時代に完成されたといわれるパタンの町はネワールの町の特徴とされる地域構造，社会構造をもっており，近世シャハ王朝，ラナ時代以来20世紀半ばまで基本的にほとんどの特徴を変えずその核心の部分を保持してきた。近代における支配体制・制度などにより，西洋建築の影響を受けたラナの宮殿の増大，特定機能の付与など都市フロンティア的状況を提示し，外部者を呼び向かわせ，新しい振興地域を形成し，従来の古都の町とは異なる地域構造・社会構造を用い，上位身分に連携する都市フロンティア的役割を果してきた。

人口などの自然増で旧市街地が拡大し，その住民が新興地域に移住し始める時に始めて古都の地

域構造・社会構造に一定の変化が見られるようになる。建造物でいえばそれは，中世時代の町並み風景を提示する建物と「バンガラ」を両端にし，それを旧市街地の隣接地から一定の連続性をもたらした変容になる。その変容の過程で，人々は，ガネサを始めとする神々の寺や仏舎利塔などを再生し，地域社会を築こうとする。これはとりわけ町の北部，東部に顕著な現象である。このような旧市街地の拡大過程につれて従来の町の境域があいまいになったり，無くなったりさえする。地域構造の変容，従来住んできた特定カーストの住民の移動，ひいては町の社会構造の変容も起きるのであたり，大衆の都市フロンティア的状況を提示し，多くの向都民を呼び向かわせる。この地域は多くの下部構造，都会的雑業に就労する流動住民にも魅力的地域である。

しかし，古都パタンでは上位3カーストが支配的であるため，彼等を取り巻く状況が変わらない限り，地域構造，社会構造の大幅な変化は期待できない。多くの中心部の住民は新興地域に移住するのではなく，そこに住み続け，儀礼的にその求心力は保持しており，他の国の古都の一部で見られるような中心部の空洞化の現象は見られない。人々はこの場を快適な生活空間にする工夫さえしている。バハ・バヒを中心に住居を構えるバレ・グバジュの社会を動態化させるほどのパラダイムの転換もそう簡単に訪れそうもない。ジャプ・クマー・グループの人々も，農業国であるネパールにおいて，食料生産・加工・流通を担い，多くの付加価値を造りながら，小規模なりにザェマンとして儀礼執行のパトロンとなり，他のカーストとの関係を保ちつづけ，小作人として他のカーストの人々と経済的関係も保持している場合も多く，その地域社会的構造を未だに保持している。さらに，このグループにおける近代教育の水準，とりわけ女性の教育水準が依然と低く，今の生活スタイルが急に変わることが期待できない。ゆえに，その地域・社会構造にも大幅な変化は簡単に起きそうもない。従って，この地域は儀礼的にしろその求心力は保持しており，そのカースト間の基本的な関係，種々の儀礼進行における各カーストの役割も再生・培養され，一種のインボリューションの現象を持ち合わせ，異種の都市フロンティアを提示しているかもしれない。

（広島大学大学院国際協力研究科助教授）

参　考　文　献

石井溥　1980『ネワール村落の社会構造とその変化』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
石井溥編　1986『もっと知りたいネパール』弘文堂。
石井溥　1987「ネパールにおけるカースト間分業体系」伊藤亜人他編『現代の社会人類学2　儀礼と交換の行為』東京大学出版会，167-195頁。
石井溥編　1995『南アジア，東南アジアにおける宗教，儀礼，社会』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
石井溥編　1997『アジア読本ネパール』河出書房新社。
岡田泰男　1994「「フロンティア理論」100周年—ターナー学説の批判と評価－」『三田学会雑誌』87巻3

号，pp.1-17。
立本成文　1998『地域研究の問題と方法』京都大学学術出版会。
立川武蔵　1987『曼荼羅の神々—仏教のイコノロジー』ありな書房。
田中公明，吉崎一美　1998『ネパール仏教』春秋社。
坪内良博編　1999『総合的地域研究を求めて』京都大学学術出版会。
ニルバチャン・アヨグ（選挙管理局）1994『マタダタ・ナマウォリ—2051サル，ラリタプル・ジッラ，ラリタプル（投票者名簿—ビクラム暦2051（1994）年，ラリタプル郡，ラリタプル市）』スリ・パンチコ・サルカル（ネパール政府）
ビスタ，D. B.（田村真知子訳）1993『ネパールの人びと』古今書院。
ラリタプル市内部資料1940『ビクラム・サンバタ1996サルコ ガル・サンキャコ・ラガタ—ラリタプル（ビクラム暦1996（1940）年の家屋・世帯調査—ラリタプル）』。
レグミ，マヘシ C.（蓮見順子訳）1998『十九世紀ネパールの農業社会』明石書店。
Bajracharya, Badri Ratna 1986. *Buddhism of Nepal*, Ananda Kuti Vihara Trust, Kathmandu.
Bhikshu Pragya Rashmi ed. 1982. *Buddha Dharmaya Ruprekha (An Outline of Buddhism)*, Gana Mahabihara, Kathmandu. (Newari)
Furer-Haimendorf, Christoph von 1956. "Elements of Newar Social Structure" *JRAI 86 part* 2, pp. 15-38.
Furer-Haimendorf, Christoph von ed., 1966. *Caste and Kin in Nepal, India and Ceylon*, Asia Publishing House, Bombay, India.
Gellner, David N. and Declan Quigley eds. 1995. *Contested Hierarchies*, Claredon Press Oxford, England.
Gellner, David N. 1986. "Language, Caste, Religion and Teritory: Newar Identity Ancient and Modern" *European Journal of Sociology*, 27, pp.102-148.
Gellner, David N. 1988. "Buddhism and Hinduism in the Nepal Valley" in Stewart Sutherland et al. Eds. *The World's Religions*, Routledge, London, pp. 739-755.
Gellner, David N., 1992. *Monk, Householder, and Tantric Priest: Newar Buddhism and its Hierarchy of Ritual*, Cambridge University Press, New Delhi.
Gellner, David N., Joanna Pfaff-Czarnecka and John Whelpton 1997. *Nationalism and Ethnicity in a Hindu Kingdom: The Politics of Culture in Contemporary Nepal*, Harwood Academic Publishers, Kathmandu.
Gutschow, Niels and Bernhard Kolver 1975. *Ordered Space Concepts and Functions in a Town of Nepal*, Kommissionsverlag Franz Steiner Gmbh, Wiesbaden, Germany.
Hofer, Andras 1979. *The Caste Hierarchy and the State in Nepal: A Study of the Muluki Ain of 1854*, Universitatsverlag Wagner.
Levy, Robert I. 1990. *Mesocosm - Hinduism and the Organization of Traditional Newar City in Nepal*, University of California Press, California.
Locke, John K., 1980. *KARUNAMAYA: The Cult of Avalokitesvara-Matsyendranath in the Valley of Nepal*, Sahayogi Prakashan, Kathmandu.
Mall, Kamal P. ed. 1989. *Nepal: Perspectives on Continuity and Change*, Centre for Nepal and Asian Studies, New Delhi.
Nepali, Gopal Singh 1988 (1965). *The Newars*. Himalayan Book Sellers, Kathmandu.
Quigley, Declan 1985. "The Guthi Organizations of Dhulikhel Shresthas", *Kailash* volume 12 (1-2), pp. 5-62.
Regmi, Mahesh Chandra 1978. *Land Tenure and Taxation in Nepal*, Ratna Pustak Bhandar, Kathmandu.

Sharma, Nutan and Niels Gutschow 1984. *Patan: Social Topography*, (authors' note).

Sharma, Pitamber 1993. "A Note on Recent Trends in Nepal's Urbanization", *Nepalese Economic Journal*, volume 1 (1), Kathmandu. pp. 33-42.

Shrestha, Chandra Bahadur et al. 1984. *Intra-Urban Movement of Population in Kathmandu City*. CEDA, Kathmandu.

Toffin, Gerard 1993. *Nepal: Past and Present*, Sterling Publishers, New Delhi.

Vajracharya, Ratna Kajee and Bijaya Ratna Vajracharya 1983. *Nepah Dehya Biharya Tahcha (Key to Viharas in Nepal)*, Mantrasiddhi Mahavihar, Kathmandu. (Newari)

Vergati, Anne, 1995. *Gods, Men and Territory: Society and Culture in Kathmandu Valley*, Manohar, Centre de Sciences Humaines, New Delhi.